

平田 久

—丹後宮津出身の異才・
未完のジャーナリスト西田 毅
(大学名誉教授)

●プロフィール

平田久^{ひらた ひさし}(1871—1923)は丹後宮津の出身で、地元の宮津中学から同志社に進み、1891年(明治24)同志社普通学校を卒業した秀才である。同期生に日銀総裁になった深井英五や今井真



平田久

幸、柏井園らがいた。とくに、深井とはよきライヴァルとしてお互いに切磋琢磨しあった間柄らしい。深井は回想録で、彼が将来の進路について迷っているとき、平田が徳富蘇峰に紹介してくれたこと、そして、平田は「夙に操觚者^{そうこしゃ}」(新聞記者—筆者注)たらんことを志し、卒業後国民新聞社に入ったが、大成に至らずして逝いた」と述べている。(「回顧七十年」昭和16年 岩波書店)

平田家は旧宮津藩(松平氏)の下級士族に属し、そのルーツはもともと浜松であったが、その昔、藩主が国替えを命ぜられたとき、殿様に従って宮津に引き移

ったという。少年時代から文章が得意で、よく「国民之友」などに投書していた。彼と同郷で小学校以来ずっと同期生であった友人の語るところによれば、中学時代の平田は小柄な美少年で秀才の誉れ高い少年であった。経済的な事情で、一時、白井という家の養子となるが、同志社の四年次生から元の平田姓にもどった。そして、そのころから体格が急によくなり、才氣^{さいき}を恃む風が見えてきて、「冷然として他を蔑視せんとし、自ら狷介を誇り、長髪を冠^{かん}つて却々人の節制や学校の規則などに拘束されぬ」というようになったという(神谷生「平田久君を悼む」『同志社時報』214号大正12年12月)。このよ

うにバンカラで奔放不羈であったが、彼は歴史・文学と語学を中心によく勉学に励み、語学は英独仏の三カ国語に通じていたという。

彼が同志社の学生時代、ちょうどそのころ民友社を起こし、文壇の登竜門といわれた『国民之友』や『国民新聞』を発刊して、飛ぶ鳥を落とす勢いであった徳富蘇峰の人氣は大変なものがあつた。熱烈な蘇峰ファンが学内にも大勢いたが、平田もその一人であつた。後輩のなかに人材を物色していた蘇峰の目にとまった彼は、学校を卒業すると直ちに民友社に入社したのである。処女作は明治25年に出版された『伊太利建国三傑』で、半年後には三版が増刷され、新聞『日本』、『朝野新聞』、『東京経済雑誌』、『早稲田文学』、『時事新報』など当時の一流紙が挙って書評を掲載するなど、評判を博した。かくして、前途有望な若き民友社員にして国民新聞記者平田久がここに誕生したのである。

●民友社時代の活躍

民友社時代の彼は、出版物として上記『伊太利建国三傑』と同じ年の明治25年に「十二文豪」伝記シリーズ『カーライ

ル』を出版している。19世紀ヴィクトリア朝英国は大英帝国の全盛期にあたり、七つの海にまたがる広大な植民地から資源が集まり、世界の工場として繁栄を謳歌する大国であつたが、そうした物質文明の発展の陰で、進行する道德的頹廢や精神文化の衰退を鋭く批判した歴史哲学者カーライルの存在は、早くから、内村鑑三をはじめ明治の知識人の注目を集めていた。トーマス・カーライル(1795—1881)は当時、竹越三叉も述べているように「十九世紀の乞食文明、虚偽開化の潮流中に屹立^{きりつ}し手を挙げ口を開きて風雲を叱咤^{きりつ}し、真実真理を教えたる明哲」(「トーマス、カーライル」というイメージで捉えられていた。19世紀英国の俗物文明の象徴たる拝金主義や虚偽、軽薄、浮華、因循な社会の悪弊を焼き払わんとする改革思想家の典型であるカーライルを、若き日の平民主義者蘇峰が、民友社出版物の重要な企画として打ち出した、「十二文豪シリーズ」の一人に加えたのである。取り上げら

れた人物はカーライルのほかに、マコーリ、ワーズワース、ゲーテ、エマーズン、ユゴー、トルストイらがいた。この文人伝は、ヴィクトリア朝英国の著名なマクミラン社の英国文人叢書 English Men of Letters スコット社の大作家叢書 Great Writers Series の二つの文人評伝叢書が企画のモデルになっている。平田はこの重要な企画の第一弾としてカーライルを担当したのであつた。新入社員のか、この抜擢からも容易に察することができる。

ほかに平田の歴史認識を理解する上で重要な文献が『伊太利建国三傑』である。イタリアが中世以来の長い諸国分烈状態



を脱して統一国家建設を実現したのはようやく1861年のことであるが、ヨーロッパ近史上、イタリアの建国と日本の明治維新はよく対比して論じられた。本書はイタリア建国の三傑マッジニー（G・マッシーニ）、カプール、ガリバルジー（ガリバルディ）の評伝である。平田は「マッジニーの熱誠、カプールの識略、ガリバルジーの勇侠、加うるにウイクトル・エンマニエル王の英毅明達」それぞれを持ち味が、いかに巧みに組み合わさってイタリア建国が実現したか、すなわち、天意・時勢の働きが偉人を興し、そして偉人が庶民を動かした道筋を流暢明快な文章によって描き出した。

序文を寄せた蘇峰は「熟慮すべし、彼邦の事歴、一に何ぞ、我邦の事歴と相類似するかを。彼も旧邦にして維命新なり、我も亦た然り、彼も革命は第十九世紀の下半にあり、我も亦た然り、彼も三個佐命の元勳あり、我も亦た然り、苟も靈機一徹すれば、彼邦の建国を論ずるは、即ち我邦の建国を論ずる也」と述べているが、明治維新の三傑（西郷、木戸、大久保）と対比しながら本書を読むとき、甚だ興味深い歴史的想念が生ずるのである。さらに、蘇峰は「平田君は、国民新

聞社中に於て、最も春秋に富む、英書に通じ、加うるに筆鋒犀利、故に斯書疎暢明快、尋常訳文の比にあらず」とあるように、本書は、マリオットの「伊太利建国者」やエンサイクロペディア・ブリタニカに収められたシモンズの「伊太利再建史」、「マッジニー伝」、「カプール伝」などの「纂訳」書である。したがって、それは書き下ろしではなく、明治時代の文獻によく見られるように複数の文獻を翻訳しながら独自の解釈を加えて編纂して出来上がった作品なのである。歴史書としては、このほかに明治30年に出版した『十九世紀外交史』がある。

●民友社から三井物産へ

民友社をやめた経緯はハッキリしない（蘇峰の国権論への転向が原因とする一説がある）が、退社後も両者の交わりは続いた。大正6年秋、蘇峰が支那漫遊旅行を企てたとき、上海に立ち寄って平田と親しく交歓している。平田はその折、蘇峰から次のような七言絶句を賦して色紙に書いてもらっている。

少年意気欲衝雲
白眼如今絕俗群
正是清霜芳菊節

春申埠上又逢君

與平田越越君 蘇峰学人

ちなみに「越越」とあるのは、平田の雅号「越越山人」のことである。蘇峰も平田の狷介孤高の気象を早くから見抜いている様子が色紙から感じ取れる。民友社を去った平田は、三井の鈍翁益田孝（1848—1938）に引き立てられて三井物産に入った。東京本店から上海支店に赴任したのが1917年（大正6）のことであった。どういう経緯で益田翁と知り合ったのか、また上海勤務の用向きが何であったのか、詳しい事情はわからない。当時、三井物産上海支店で平田を出迎えた部下の日高進の語るところによれば、着任早々、支店長に挨拶する平田は、「時に私が上海勤務を命ぜられたところで、元来私は、石炭一噸、砂糖一俵の商売のできる人間ではない。明日から何を致すのでしょうか」と人を食ったような態度であったという（「師恩追懷——故平田久先生の面影」）。そして平田は殆ど出社せず、毎日、日本人クラブの広い一室を定宿にしてとぐろを巻き、自ら「上海における我が仮城郭なり」と称して中国の要人や革命志士、英米の新聞記者、得体の知れない煽動家といった人た

ち、そして日本側からは総領事や各社の支店長クラスの実業家や駐在武官、浪人も集まってきて、平田事務所はさながら「或る時は私設公使館、或る時は梁山泊たるの奇観」を呈したという。時代はちょうど第一次世界大戦後の五四運動や民衆の反帝反封建運動が高まりを見せる頃であり、激動する中国内部の形成を調査探索して、言論機関や要路の人に向って情報を提供していたというから、もしかしたら対中国政策の秘密工作に関わった大陸浪人のような仕事に関わっていたのかもしれない。

上海時代の平田が豪放磊落、斗酒なお辞せぬ愛酒家ぶりを発揮し、遊興にふける生活を仄聞した旧友たちは、平田が初志を忘れ、才子才におぼれて墮落したというイメージを持つようになった。

孫文、唐紹儀をはじめ革命勢力との交渉もあつた平田であるが、彼の上海滞在は大正8年で終わり、同年春、東京へ帰って三井の参事（益田の私設秘書兼顧問格）の閑職につく。1921年（大正10）5月、三井を正式に退社したあと、「共同印刷合資会社」を創立しその社長に就任した。印刷業を起こした動機は、他日、独立自主の言論機関を作りたいという年

来の希望であつた。他者から何らの掣肘を受けない自前の印刷工場をもち、普段は印刷業務に従事しながら、収益を得たら自らの執筆原稿を印刷して世に頒布すること、具体的には、単行本や週刊評論新聞の発刊の計画を抱いていたようである。そして、印刷会社の経営方針はユニークな「利潤配分制度」を取り入れた労使協調組織の経営方法という新機軸を拓いた。すなわち、労働者は毎月給料のほか、利益に応じて利潤を分割取得する制度を取り入れて労資問題の解決と労働運動に挑戦しようとした。自前の印刷工場と独立のジャーナル経営という企画の背景には、新聞が民衆の世論を反映し、真に社会の木鐸たる権威を発揮するには、商業主義に毒され大衆の嗜好に媚びて発行部数を伸ばすという営業中心の方針が

あった。そして、資本主義の利益至上主義に立てば、報道の新奇さや迅速さを競うあまり、どうしても記事論評が軽薄に流れ、重厚沈着な識見や判断に欠けるようになるという現実のジャーナリズム批判の姿勢があつた。そこには、「今後生存の全部を新聞記者の生涯に一致せしめ、たといい細微ながらも、日本における

新聞紙の発達に向って貢献するところあらんことをねがう」（『新聞記者之十年間』）という平田の初一念が貫かれているといえるであろう。

1921年（大正10）の初夏、湘南の鵠沼海岸にある益田翁別邸の隣に新居を建設し、「遠来軒」の扁額を掲げた。和漢洋万巻の書籍を収める石造りの土蔵の書庫と見事な紺色の煤竹で作られた茶室「萬無庵」もある、その家は、趣味豊かな平田の人となりをよくあらわした脱俗閑雅な住まいであつた。平田の茶道の趣味は益田の影響によるものらしい。そこを終の住処と定め、「悠々自適」の生活を営まんとする矢先の1923年（大正12）9月、関東大震災であえない最期を遂げた。享年52歳の働き盛りであつた。

●「益者三友あり」

——新島・蘇峰・益田

論語に「益者三友あり」という言葉がある。人生は人との出会いによって決まるといえるが、平田が生涯で得た三友とは「精神の新島襄先生、学問の徳富蘇峰先生、実業の益田孝男爵」と日高進は述べている（前掲「師恩追懷」）。平田が青年期に出会った新島から受けた影響と感化

